

国際交流委員会からのお知らせ

国際交流委員長 嘉田由紀子

国際交流委員会は発足してまだ年月も浅い、若い委員会です。今回の理事の交代に伴う委員会の改組では、これまでの活動を継承しながら、地区ごとの連絡代表ということで、次の理事会員に委員をお願いすることになりました。地区別委員は、小林一穂（東北）、青柳みどり（関東）、黒柳春夫（中部・北陸）、永野由紀子（中国・四国）、坂本喜久雄（九州）、の方たちです。またこれまでの活動の継承を図るという意味で非理事のなかから、熊谷（松田）苑子、河村能夫、高橋明善、鳥越皓之の方たちに委員をお願いすることになりました。

この委員会の活動は、（１）国際農村社会学会（IRSA）との連携、（２）アジア農村社会学会のたちあげ準備、（３）一般的な国際交流の企画・推進、という３点があると前任の鳥越さんから引き継いでおります。

（１）については、今年７月２２日から２６日にかけて、ルーマニアのブカレストでひらかれる「第９回国際農村社会学会」が当面の話題となるでしょう。共通テーマは「地球の明日にむけての農村の潜在力」。案内パンフレットでは、「これまで農村については、＜危機＞＜衰退＞＜問題＞などという形容詞が多く付されてきた状況を脱皮して、農村の資源や行動体系などに学ぶなかで、次の世紀の生き方を模索しよう」と呼びかけがなされています。すでに３０名ほどの方が参加の登録を終え、２０数名の方は論文発表を予定しています。発表予定のテーマは、日本農村の家族問題、農村女性問題、環境問題など多岐にわたっています。日本としての独自のセッションをくむことができるかどうかは、現在検討中のようです。

（２）については、東アジアでの農村社会学者の連携組織をつくろうということで、少しずつ準備が進んでいるようです。

（３）については、日常的な活動こそが力となるのではないのでしょうか。世界中がまさにインターネットで結ばれる時代になり、意識としても、具体的なコミュニケーションプロセスとしても、国際的な流れに否応なくとりこまれてしまいます。パソコン通信を手にすることができた８０年代後半には、E-mailのような通信手段がこれほど急速にひろまるとは想像していませんでした。でも逆に、なんでそんなに早く意見をやりとりして忙しくさせられるの、という疑問も持ちつづけています…。脱線でした。

これから２年間、不慣れな役を全うできるか不安でもあります。みなさん、どうかよろしく。